長野大学紀要　第34巻第3号　　49―67頁（223―241頁）2013

明代マンチュリア史研究の現状と課題（上）

Reviewing the Historical Studies of Manchuria in the Ming Era (1)

塚　瀬　　進*
Susumu TSUKASE

はじめに―概説書の考察

第一章　明朝によるマンチュリア統治
　①遼東統治
　②ヌルガン都司・羈縻衛所
　③朝鮮・モンゴルとの関係
　④遼東辺牆
　⑤軍屯、軍戸・軍士
　⑥明代後期の遼東
　　（以上本号）

第二章　女真史研究
　①建州女真
　②海西女真・フルン四部
　③野人女真
　④明朝・朝鮮・モンゴルとの関係
　⑤社会経済状況
　⑥馬市
　⑦三万衛、安楽・自在州

はじめに―概説書の考察

本稿は前稿［塚瀬2012］に続き、新たなマンチュリア史を構築する準備作業として、明代マンチュリア史に関する諸研究を整理したものである。前稿では、ヌルハチの勃興から入関までをあつかったので、本稿では明初からヌルハチ勃興までを対象とする。

まず概説書について見てみたい。明代マンチュリア史の概説書は、中国東北史の観点から書かれたものしかない。李建才［1986a］は、明朝による遼東平定から清朝の入関までを概説している。第一章「統一東北、接管元在東北的全部版図」では、遼東平定から永楽帝による女真招撫までを概述する。第二章「建立東北地方軍政機構、発展遼東屯田」と第三章「奴児干都司和蒙古、女真各部」とでは、遼東とヌルガン地区の状況について、第四章「蒙古、女真各部的朝貢和朝貢道」では朝貢の様子について述べている。第五章「兀良哈三衛和女真各部的南遷及其社会経済的発展」と第六章「馬市貿易和遼東辺牆」では、明代中期の社会経済状況について記述する。第七章「明在東北的統治危機和後金的発展壮大」、第八章「後金従奴隷制向封建制転化」、第九章「皇太極統一東北和清軍入関」ではヌルハチの勃興、ホンタイジによる統治について述べている。

楊暘［1991］は、明代を３期に分けて叙述してい

*環境ツーリズム学部教授

る。上篇「封建社会後期中国東北社会的深刻変化」は、1371年(洪武４年)～1435年(宣徳10年)までの65年間をあつかい、「統一・発展期」と位置づけている。中篇「明王朝的腐敗和東北社会的大動蕩」は、1436年(正統元年)～1521年(正徳16年)の85年間をあつかい、「衰退期」と位置づけている。下篇「満族的崛起与東北統治的更替」は、1522年(嘉靖元年)～1644年(崇禎17年)の123年間をあつかい、「解体期」と位置づけ、各時期の政治、経済の変化について述べている。楊暘[1993]は楊暘[1991]とほぼ同じ内容である。

佟冬主編[1998a、1998b]の『中国東北史』全６巻のなかで、叢佩遠が執筆担当した第３巻「明代東北編」と第４巻「明代東北編」も概説として有用である。章構成は、「明王朝対東北地区的統一与管轄」、「蒙古、女真、朝鮮等族的遷徙与分布」、「後金(清)的統一戦争与八旗制度」、「明代東北地区各族人民的反抗闘争」(以上、第３巻)、「明代東北地区各族経済的発展」、「各族文化習俗」(以上、第４巻)である。

楊暘主編[2008]は、テーマ別の論文を集めた内容だが、概説的な知識を得るには有用である。第一章「導論」ではこれまでの研究史について整理している。第二章「明代東北疆域轄治体制中的遼東都司」では遼東統治の特徴について、第三章「明代東北疆域轄治体制中的大寧都司与北平行都司」では大寧都司管轄下のマンチュリア西部の状況について考察する。第四章から第八章までは、ヌルガン地区下の状況と衛所の設置状況について述べている。第九章「明代東北疆域轄治功能体現了明朝国家権力的行使」では、衛所に対して明朝が行使していた権限について検討する。第十章「明代衛所制度与清代噶珊制度」では、明代の衛所制と清代の噶珊制の類似点と相違点について考察する。第十一章「明代東北疆域与中原文化」は中原文化の影響について、第十二章「曹廷杰考察明代東北疆域」は曹廷杰が考察した明代東北の疆域について述べている。

楊暘[1988]は、明代の遼東がどういう状況であったのか、概説的に知るには有用である。第一章「明朝対遼東的統一」では、元末の状況から明朝による遼東都司の設置までを述べる。第二章「明代遼東都司与奴児干都司的関係」では、遼東都司とヌルガン都司との関係について考察する。第三章から第十二章は、明代遼東の状況についてテーマ別に述べており、第三章「明代流人在遼東」、第四章「明代遼東屯田和遼東土地占有関係」、第五章「明代遼東馬市貿易」、第六章「明代遼東辺牆」、第七章「明代遼東駅站的設立、管理及其任務」、第八章「明代遼東民族」、第九章「明代遼東人民抗倭闘争」、第十「明朝対遼東的腐朽統治和兵変」、第十一章「後金政権継明代統一遼東地区」、第十二章「明代遼東文化」である。遼東都司の役割や機能についてはほとんど考察していない。

第一章　明朝によるマンチュリア統治

明代前期に明朝がどのようにマンチュリアを経略したかに関する研究は多い。戦前では和田清[1934-37]が、宣徳年間までの状況について詳細な考証をおこなっている。陳文石[1967]は、正統年間までの状況について考察している。1970～80年代にかけては、張勝彦[1976]、符生[1979]、黄文沁[1981]、孫炎[1985]、 張立凡[1983]、呉文銜[1988]が検討している。90年代には智喜君[1991]、趙立人[1994]は遼東防衛体系の形成について、李洵[1990]は全般的な遼東政策について考察した。胡凡[1998、2006])も遼東の辺防について検討するとともに、遼東だけを事例にしたわけではないが、永楽期を考察した論文も参考になる。孫奕善[1988]、蔭木原洋[2008]、谷井陽子[2009]も、マンチュリアだけを検討した論文ではないが参考になる。

漢人以外の人々に対する対応については、楊暘[1981d]、孫与常[1986a]、張士尊[2002a]が考察している。張景波[2009]は、洪武年間に活躍した遼東総兵官楊文について検討している。

明朝は14世紀末にはマンチュリアから元朝を追い出し、マンチュリアを統治下に置いた。以下では、明朝はどのような統治政策をおこなったのか、遼東とヌルガン地区に分けて述べてみた。

①遼東統治

遼東には遼東都司が置かれ、軍政を管轄した。遼東都司の概述は楊暘[1988]がしている。遼東都司の下には衛所が設けられた。衛所は軍士が所属、生活する組織であった。遼東には州県は設置され

ず、衛所を単位とした軍政色の強い統治がおこなわれた。遼東での衛所の設置年代については史料により異なっており、張維華[1934a]、楊暘[1980]、朱誠如[1980]、徐桂榮[1992]、張士尊[1994a]、馮季昌[1998]は各種の史料を比較検討して、衛所の設置年代について考証している。個別の衛所の動向については、李智裕[2011a]が明代中期に定遼右衛が鳳凰城を管轄することになった背景、経緯について考察している。林世慧[1990]は、遼東の城鎮は衛所の治所が置かれたところであり、その系譜には遼・金・元以来の城鎮と、明代になり政治的、軍事的必要性から建設された城鎮の二種類があったと指摘している。

明朝の地方統治は、軍事担当の都司、民政担当の布政司、監察担当の按察司の三者によりおこなわれた。そして、この三者の上位者として巡撫が地方長官化していた。こうした明朝の地方統治のあり方と遼東の統治機構は異なっており、遼東には軍事担当の都司は置かれたが、布政司、按察司は置かれなかった。それゆえ、遼東都司は軍事以外にも民政を担当していたと考えられ、その職務内容の具体的な分析がおこなわれた。

李三謀[1989、1996]は、遼東都司は軍事以外の職務もしていたことを指摘し、徴税、農業振興、教育、商業管理、裁判をしていたと主張した。叢佩遠[1991]は、第一に遼東統治は遼東都司を頂点とした軍政ではなく、山東按察使、山東布政使が民政に関与していたこと、第二に遼東とヌルガン地区の衛所制は同じではなく、遼東都司は衛所軍士に関する民政的な職務も担当していたこと、第三に正統年間以降、ヌルガン都司の官員は三万衛や鉄嶺衛の官員が兼任し、ヌルガン都司は遼東都司の付属機構のようになり、弘治年間以降は遼東都司がヌルガン地区の「辺務」を担当していたことを指摘した。そして遼東都司の特徴として、軍事では左軍都督府に隷属し、民政は山東の管理を受けていたこと、遼東の衛所には軍事だけでなく民政的な職務もおこない、さらにはヌルガン地区の管轄も担当するという多様な役割を担っていたと主張した。

張士尊[1997-98、1998]は遼東統治の変化を考察するにあたって、まず総兵の職能の変化について着目し、総兵や宦官の権限拡大により、遼東都司の権限は縮小していたことを指摘した。次いで張士尊[2002b]は、遼東統治の変化について画期的な論文を発表した。以下ではやや詳しく、その内容についてまとめてみたい。張士尊は、遼東に設置された各種官職の関係性は明確ではなく、その時々の状況から機能した傾向が強いと考え、職務規定を詳細に検討する方向性ではなく、実際の状況からその職務内容を抽出する方向で実態への接近をはかった。具体的には『明実録』にある上奏を分析して、その案件では誰に権限が付与されたのか、だれが権限を行使していたのかを分析した。『大明会典』や『明史　職官志』などの静態的な記述からの分析ではない点が斬新であった。

そうした分析を通じて、遼東都司の職務変化を以下のように解釈した。洪武年間では①軍事、②軍糧の確保、③各民族の融和、④朝鮮との関係、⑤行政管理の五つを管轄していた。永楽年間に鎮守総兵が設置され、遼東の軍事にかかわると遼東都司の職務も変化した。永楽年間は過渡期であり、鎮守総兵と都司の権限について明瞭な規定はなく、鎮守総兵は独立した機構を形成していなかったので、都司をないがしろにすることはできなかった。ところが、宣徳年間に鎮守総兵の軍事的職能は強化され、都司は行政管理に特化していった。そして正統、景泰年間に鎮守総兵をトップとする軍事機構は強大化した。しかし、成化年間以降では巡撫の権限が強くなり、鎮守総兵の権限は縮小したと主張した。

巡撫は1435年（宣徳10年）に監察業務のために派遣された。それゆえ、都司や鎮守総兵の職務と重なる部分もあった。1442年（正統７年）には提督が派遣され、軍権では鎮守総兵より上位に置かれた。その後提督は廃止され、その職務は巡撫が兼管した。ここに巡撫は監察権と軍権とをもつ強大な権限を掌握した。そして、成化年間以降では遼東辺務の立て直しをはかるため、巡撫は兵備を管轄下に設置した。兵備は嘉靖末年には六名に達し、巡撫の権限が増大してことを示している。その一方で巡撫と同様に監察業務をおこなった宦官・太監の権限も、成化年間以降に増大した。

こうした変化の結果、嘉靖末年の遼東統治は、①都司をトップとする行政管理系統、②鎮守総兵をトップとする軍事鎮戍系統、③巡撫をトップと

する行政監察系統になったと主張した。そして海州衛を事例にして、行政は遼東都司、軍政は海蓋参将、監察は太僕寺少卿(西平兵備)が担当したと指摘した。さらに、成化年間以降、政策決定に関する発言権は巡撫と鎮守太監(宦官)が強く持ち、総兵の力は低下してしまい政策執行者になっていたと主張した。

また、張士尊[2008a]は山東行省との関係について考察し、遼東統治の画期は巡撫、提督の派遣であったとし、正統年間以降に新たな機構が形成されたと指摘した。通説的な、正統年間以降遼東には分巡道、分守道が設けられ、これらは山東按察司、山東布政司の延長にあったという理解に対して、そうではなく巡撫をトップとする「遼東新管理体制」が形成されたとした。それゆえ、遼東と山東の間には隷属関係はなく、遼東には独立した行政実態があったと主張した。

張士尊の研究により、遼東での行政全般は遼東都司が管轄したとする見解は過去のものとなった。楊暘主編[2008]の第二章「明代東北疆域轄治体制中的遼東都司」は、明朝による遼東統治の特徴として４点を指摘している。第一に、山東按察司、山東布政司が司法、行政に関与した。第二に、総兵官、鎮守太監、巡撫、都司の四者が協同して民政、軍事をおこなった。第三に、州県制ではなく衛所制が布かれ、衛所制のなかで民政もおこなっていた。第四に、档案を使い、遼東の官員には流官が多かったことを指摘した。

日本では荷見守義[2000]が、遼東都司や遼東総兵官の職務、遼東と山東との関係について考察している。荷見守義は、まず遼東の民政と山東布政司との関係性について着目した。次いで荷見守義[2006]は巡按山東監察御史を事例として、遼東行政への山東側の影響力について検証し、山東から派遣された官僚を遼東行政の応援部隊的な役割を果たしており、遼東行政に山東側が関与する余地はなかったと主張した。また、荷見守義[2007]は遼東守巡道官僚の肩書について検討を加え、その職務内容を確認する作業をおこなった。そして档案を使って永楽年間の遼東都司の権限について考察し、遼東都司は本来ならば都司が持っていない統兵権を持っていた可能性を主張した。そして荷見守義[2009]では、統兵権を含む広範な権限を持っていたころからその職務は膨大になり、遼東都司だけでは対応できなくなったので、山東布政司、山東按察司から派遣された官僚の助けを借りる必要性があったのではないかと指摘した。

近年の荷見守義[2010、2011a]では、洪武年間の遼東総兵官の動向を考察するとともに、巡按山東監察御史には山東布政司管内の管轄者と遼東鎮の管轄者の二系統があったことを明らかにしている。また荷見守義[2011b]は裁判事例を档案を使って考察し、遼東都司や分守遼海東寧道に訴え、それでも納得できない場合は巡按山東監察御史に訴えていたことを明らかにした。

陳暁珊[2011]は、嘉靖年間以降の遼東統治について新見解を主張している。嘉靖年間までに遼河を境にして、遼陽を中心とした遼東と、広寧を中心とした遼西に分かれて軍事・行政が行われるようになった。これを背景に、明朝は遼東都司と各衛所の間に中間的な行政機関を設けて、事態への対応を迅速、円滑しようとした。その結果、嘉靖年間に遼東都司管轄下には、①寧前兵備道(春夏寧遠、秋冬広寧前屯)、②遼海東寧分巡道(春夏錦州、秋冬義州)、③遼東行太僕寺(海州)、④遼東苑馬寺(蓋州)、⑤遼海東寧分守道(遼陽)、⑥開原兵備道(開原)が置かれ、遼東を六地区に分割して統治していたと主張した。そして、こうした措置を、軍事管理制度を修正して文官監督制度を導入しようとする試みであったと評価した。また智喜君[2000]は、遼東の要職についた江蘇、浙江出身の状況について考察した。

遼東の衛所には衛学が置かれ、儒学、書院が設けられていた。張暁明[2008]、張士尊[2010]は遼東における教育状況について考察している。郭倍貴[2011]は、遼東での進士合格者72名を検出し、その後の動向について検討を加えた。ヌルガン地区には、こうした教育機関は設けられなかった。この点にも明朝が実施した、遼東とヌルガン地区での統治政策の相違を見て取れる。

②ヌルガン都司・羈縻衛所

ヌルガン都司の設置過程や役割について、先駆的に考察したのは1919年に永寧寺を調査した鳥居龍蔵[1947]であった。楊暘[1982b]は、ヌルガン都司の設置過程とその機能、ヌルガン地区に設置さ

れた羈縻衛所の設置過程について考察した。衛所官の任命、紛争処理、移動の許可などは明朝がしていたことから、明朝は羈縻衛所の実効統治をしていたとみなし、それゆえヌルガン都司の管轄地は明朝の「領土」であったという見解を主張した。ヌルガン都司の設置過程、特徴については鐘民岩[1974]、鄭天挺[1982]、李興盛[1982]、蒋秀松[1990]も考察している。

中国の研究のなかでも、張士尊[2003]の見解は注目される。張士尊はヌルガン都司の機構は簡素なこと、各羈縻衛所は中央政府と直接関係を保ち、ヌルガン都司を経由したことはないことから、統治機構というよりは招撫を目的としていたとみなした。そして、イシハによる招撫の終了後、ヌルガン都司は機能を停止したが、明朝は正式な廃止は表明しなかったのでその記録は存在し続けた。大明会典に記述はあるとはいえ統治機構の実態はなく、地理的な概念になっていたと主張した。

鞠徳源[1980a]は『三万衛選簿』に掲載されているヌルガン都司に関わった衛所官を分析し、どのような人物が衛所官であったのか考察した。杉山清彦[2008]は明初のマンチュリア政策、とりわけヌルガン経営について検討を加え、その目的は対モンゴル戦略であり、その経営を担った人は漢人ではなく女真、モンゴル人であったと主張した。ヌルガンに派遣された人物として有名なイシハについては、江嶋壽雄[1951、1953]、叢佩遠[1980a]、盧偉[2006]が考察している。

ヌルガン都司が置かれた永寧寺の考古学的調査についてはアルテーミエフ[2008b]が詳しい。斉藤利男[2000]による調査報告も興味深い内容である。永寧寺碑文については内藤湖南[1929]が先駆的に取り上げ、その内容について考察した。現在では多くの研究が出されており、羅福成[1937a、1937b]、鐘民岩[1975]、鞠徳源[1980b]、楊暘[1983b]、傅朗雲[1985]が検討を加えている。女真文の碑文については、長田夏樹[1958]、和希格[1993]、愛新覚羅烏拉熙春[2009]が考察している。叢佩遠[1980b]、傅朗雲[1988]は、曹廷傑による永寧寺碑文研究について述べている。

碑文を分析して、当時の状況について考察した研究も出されている。賈敬顔[1993c]は永寧寺碑文に記述のある人物が、どのような活動をしていたのか検討した。蒋秀松[1982]は碑文の内容をもとに、明代マンチュリアの民族関係について考察している。楊暘[2005a、2008(日本語訳)]は碑文の内容を検証して、黒龍江下流域からサハリンにおよぶ範囲に明朝統治がどのようにおよんでいたのか考察した。また楊暘[1981a、1995、1996]は、ヌルガン都司管轄下で活動した女真の動向や、永楽帝が仏教を辺境統治策に使っていたことについても考察している。元～明時代のアムール川下流域における仏教寺院の状況については、アルテーミエフ[2008a]が詳しい。

ヌルガン都司管轄下には数百におよぶ羈縻衛所が設置されたが、その所在地が現在のどの場所であったのか、比定することは難しい。「明実録」は羈縻衛所の設置について述べているにすぎず、場所についての記述もあるとはいえ、曖昧な記述であったり、その後の史書には載っていない地名が記されていることもある。歴史地理の考証に尽力した和田清[1930-32. 引用は1959、p. 168]も「(女真)諸衛所の位置は今日不幸にして大方詳でない」と述べている。明人は女真の入朝、来貢には関心はあったが、女真がどこに住み、どのような生活をしていたのかなど「野人の俗」についての関心は低かったので、曖昧、簡単な記述に止まったのではないかと推測される。

ヌルガン都司管轄下の羈縻衛所については、戦前では孟森[1928]が『満洲源流考』を使って衛所の場所について考察した。楊暘[1982b]、黎敬文[1976]、滕紹箴[1995]は設置年代、場所などについて検討している。松花江流域に設置された衛所については楊暘[1983a]が、豆満江流域については楊暘[1992a、1994、2002]、建文[1995]が、ウスリー川流域については楊暘[1979]が、呼蘭方面については王化鈺[1993]が検討している。榎森進[2008]はアムール川下流域の羈縻衛所について考察を加え、15世紀初に設置されてから16世紀後半まで明朝への朝貢を続けていたことを明らかにした。そして清朝がアムール川流域で組織した辺民は、明朝が築いた衛所制、朝貢関係を基盤に成立したという見解を主張した。榎森進はサハリンにも羈縻衛所は設置されたと主張したが、杉山清彦[2008、p. 131注４]は疑問を唱えており、今後の考察が待たれている。

羈縻衛所を個別に考察した研究には以下がある。楊暘[1978、1982a、1984]はアムール川下流の亦児古里衛、牡丹江流域の忽魯愛衛、呼蘭河流域の成討温衛、塔山左衛について考察している。李健才[1979]は禾屯吉衛について考察している。董玉瑛[1985]は、肥河衛と嘔罕河衛の位置が時期によって違っていたことを指摘した。肥河衛と嘔罕河衛はフルン四部のホイファの世系と係るので、この問題は重要である。賈敬顔[1993b]は1443年に設置された成討温衛の首長であった阿哈と娄得が、どのような人物であったのか考察した。張士尊[2007]は、建州五部のドンゴ部に連なる衛所として温河衛を検討した。

河内良弘[1975]は兀者衛について検討を加え、主に『世宗実録』巻84(世宗21年正月己丑)の記述をもとに兀者衛の位置、農耕、牧畜、婚姻などについて考察した。河内良弘[1966、1978]は鴨緑江上流にあった温河衛の位置、構成民、生活圏について考察し、野人女真の阿速江衛についても検討している。また河内良弘[1971]は、朝鮮に来貢した「忽剌温兀狄哈」が属した55箇所の衛所についても考察している。

羈縻衛所が置かれた黒龍江流域にどのような人々が住んでいたのかについては、日本では和田清[1937a、1939]、増井寛也[1982]が考察している。中国では呂光天[1981]、呉文衒[1989]、賈敬顔[1993a]が考察している。しかし、漢文史料の記述をどう解釈するのか、意見は分かれている。

楊暘[1992c、1993]は、黒龍江を通じてサハリンや日本北方と交易関係があったことを主張している。荷見守義[2008]も、明朝の時に、北方日本とマンチュリアとの間には交易関係が存在したことを主張している。

③朝鮮・モンゴルとの関係

朝鮮はマンチュリアと境を接していることから、朝鮮にとってマンチュリアの動向は重要であった。以下では、マンチュリア史との関わりから明朝と朝鮮との関係を考察した研究について述べてみたい。主要な論点が、明朝と朝鮮との政治的、外交的関係にある研究は除外している。葉泉宏[1991]、姜龍範[1999]は明代中朝関係史の概説であり、必ずしもマンチュリアとの関係だけを叙述しているわけではないが参考になる。

明朝初期におけるマンチュリアと高麗との関係については孫衛国[1997]、姜龍範[1998]、李新峰[1998]、刁書仁[2000]が考察している。北元との関係をも含めた明朝、朝鮮との関係については、張士尊[1997]、白初一[2006]、王剣[2006]、趙現海[2010]が考察している。高麗末年から朝鮮初期にかけて、高麗・朝鮮はその領域を北方に拡大し、マンチュリアとの関係性を深めていた。この問題については、津田左右吉[1964a、1964b、1964c、1964d]が先駆的に考察し、次いで池内弘[1917、1918b、1918c、1916-20]が詳細な研究を発表した。また末松保和[1941]の研究も優れている。刁書仁[2001a]も高麗・朝鮮の北方への拡大について考察している。1387年12月に明朝は高麗に対して、鉄嶺以北を明朝の領域にすると通達した(鉄嶺問題)。これに高麗が反発したことについては、池内弘[1918a]、張輝[2003]、張杰[2003、2004]、姜陽[2006]、李花子[2007]が考察している。

永楽期のマンチュリアと朝鮮との関係については荷見守義[2002]、北島万次[1995]が考察している。土木の変前後のマンチュリアと朝鮮の関係については、河内良弘[1973]、荷見守義[1995、1999]、于暁光[2005]が考察している。15世紀以後のマンチュリアをめぐる明朝と朝鮮との関係では、女真が関与しているので、後述の「第二章女真史研究④明朝・朝鮮・モンゴルとの関係」の項目も参照されたい。

15世紀において朝鮮は北方への領域拡大を企図したが、十分な統治ができずに放棄することもしていた。その変遷については、戦前においても検討されており、瀬野馬熊[1923]は世祖の時に廃止された四郡(慈城、虞芮、閭延、茂昌)の位置、廃止の事情について考察した。李仁榮[1937-39]は瀬野馬熊の考証によりつつも、廃四郡の位置、疆域について自説を主張した。深谷敏鐵[1956、1959、1961a、1961b]は、朝鮮の世宗は1434年(世宗16年)以降、北辺に住民を移住させて開拓、辺防の強化をはかったが、多数の逃亡者や移民送出地の荒廃が生じ、その成果は芳しくなかったことについて考察した。刁書仁[2000b]は元代から正統年間までの中朝間の辺界について考察し、陳慧[2007]は図們江が国境として認識されていたかどうか検討を

加えた。王冬芳[1997]は16世紀には鴨緑江、豆満江を境とする疆域が形成されたと主張した。

明代においてマンチュリアに流入した朝鮮人は多く、朝鮮人にとってマンチュリアへの流入は生活のための選択肢の一つであった。李婷[2002]は、遼東へ移住した朝鮮人の状況を考察した。朴彦[2008]は朝鮮人の遼東への流入状況について検討を加え、そのピークは平安道の朝鮮人が長城築城などの辺境防御工事により困窮した、世宗(1419～1450年在位)後半期であったと主張した。

朝鮮は明朝により朝貢路は決められていた。朝貢路がどのような理由から、どの経路に変わったかについては、張士尊[2000]、張暁明[2010]が考察している。

マンチュリアにおける明朝とモンゴルとの関係では、ウリャーンハン(兀良哈)をめぐる研究がおこなわれている。興安嶺の東側にいたモンゴル系種族に対して、明朝は三つの羈縻衛所(泰寧衛、福余衛、朶顔衛)を設けていた。ウリャーンハンの羈縻衛所については、戦前から研究がおこなわれている。箭内亙[1914]は、三衛の名称について考証をおこなった。和田清[1929、1930、1930-32]は、三衛の位置、明朝との関係について考察を加えた。中国では李健才[1985]、奥登[1986]、戴鴻義[1990]、達力扎布[1993]が概略についてまとめている。泰寧衛については李艶潔[2005、2006、2007]、宋徳輝[2010]が考察している。朶顔衛については額徳[2001]、烏雲畢力格[2003]が概略について述べている。16世紀後半以降の朶顔衛の状況については奥拉[2001]、特木勒[2003、2004]が検討している。李艶潔[2002]は、ウリャーンハンは宣徳年間に南下し、泰寧衛は朶顔衛に圧迫されていたことを指摘した。程龍[2001]は、ウリャーンハンが南下した理由として、寒冷化という気候変動があったことを主張している。ウリャーンハンと他のモンゴルや女真との関係については、周競紅[1992]が考察している。

袁森坡[1991]は明代後期における遼東でのモンゴル人の状況について、包慶徳[1988]は、遼東近隣にモンゴル人がどれくらい分布していたかについて検討している。

④遼東辺牆

明朝は遼東とヌルガン地区との境界に遼東辺牆を築いていた。遼東辺牆の修築年代、その位置について、初めて検討を加えたのは稲葉岩吉[1913]であった。稲葉岩吉は、遼東辺牆は先ず遼河以西に、モンゴル、ウリャーンハンの侵攻を防ぐ目的からつくられ(西牆)、その修築年次は、辺牆修築に従事した王翱、畢恭の赴任時期[智喜君2003]、『英宗実録』巻110正統８年(1443年)11月甲戌の記事を根拠に、1442～43年(正統７～８年)につくられたと考証した。遼河以東につくられた、開原～撫順～鳳凰城～九連城の東牆は、1367年(成化３年)の女真討伐後、女真の再来を防衛する目的から構築されたと指摘した。戦前において中国では、張維華[1934b]、潘承彬[1936]が遼東辺牆をとりあげ、修築年代、位置について検討を加えた。

戦後になり、日本では遼東辺牆についての専論は発表されていない。中国では文献史料にもとづいて考察した研究には、黄麟書[1979]、叢佩遠[1985a]、何宝善[2007]がある。叢佩遠[1993]は、明朝によるマンチュリア経営に果たした遼東辺牆の役割について論じた。遼東辺牆はマンチュリアを漢人、モンゴル人、女真の三つに分けて、それぞれの居住地を明瞭にする目的から作られ、1621年にヌルハチが遼東を占領したことで、その役割は終わったと主張した。

実地調査を踏まえた研究としては、劉謙[1989]の著作が優れている。多数の写真、平面図が掲載されており、遼東辺牆の具体的なイメージを得ることができる。薛景平[1996]は1990年に行った現地調査をもとに考察している。張士尊[1992a、1992b]は実地調査と史料を駆使して、西牆の状況について検討した。また遼東辺牆ではないが、張士尊[1990-91]は海城近隣の墩台について考察している。以上の他に、劉謙[1982]、薛作標[1983]、鉄嶺市博物館[2011]による考察もある。

⑤軍屯、軍戸・軍士

遼東に置かれた衛所は、自給自足を原則とする軍屯を経済的基盤にしていた。衛所には軍事に従事する人だけでなく、農耕に従事する人もいた。宣徳年間以降、軍戸は農業以外のさまざまな差役を課せられ、その負担に耐えかねて逃亡する者が

増えた。また、有力者が屯田を私占するようになり、軍屯は崩壊していった。軍屯と軍戸・軍士の状況は密接に関係している。以下では両者を分けつつも、一緒に検討する場合もある。

戦前において、遼東での軍屯を検討したのは清水泰次[1935、1937]であった。清水泰次は遼東での軍屯の始まりから崩壊までを概述的に跡付けた。

戦後の日本では、軍屯についての研究はおこなわれたが、個別地域の軍屯に関する研究は少ない。諸星健児[1990]は、遼東での軍屯は永楽年間に最盛期を迎えたが、屯田科則の改定、軍士の逃亡により税糧は減少した。軍屯による軍糧調達が減少したことから、明朝は開中法と京運年例銀により補った。しかし、開中法により調達できた軍糧は少なく、臨時的な補給手段にとどまった。京運年例銀は正統年間にその支給がはじまり、以後増加し、明末には軍糧調達の主要手段となった。つまり遼東では軍屯の衰退により、穀物現物を確保するのではなく、銀を送り、その銀で穀物を購入するか、直接軍士に銀を支給する方法へと変化したと主張した。川越泰博[1986]は、遼東の軍屯で使われる耕牛は不足していたので、朝鮮から耕牛を調達していたことを明らかにした。

中国では楊暘[1981b]が永楽年間ごろまでの状況を考察し、軍屯は遼東での農業生産回復に貢献したと主張した。叢佩遠[1985b]は宣徳～天順年間に軍士の逃亡が顕著になり、成化～正徳年間に軍屯の民田化がすすんだと主張した。趙中孚[1989]は、明初の軍屯の始まりから、ヌルハチによる遼東占領までの軍屯の変化について考察している。姜守鵬[1990]は、永楽～弘治年間では軍屯は減少したが民屯は増加していたことを、嘉靖年間以降では住民の逃亡が主因となり軍屯、民屯ともに減少していたと主張した。衣保中[1993]、孟東風[1993]は、遼東の軍屯は衛所官による私有化、屯丁の逃亡により機能しなくなったので、明朝は招民耕作や開墾奨励により農業生産を維持しようとした。しかし、軍士の食料のすべてを、遼東でまかなうことは難しかったことを明らかにした。そうした状況下で明朝がどのように遼東で軍糧を調達、確保していたのかについては、張士尊[1994b]が検討している。

周遠廉[1980b]は遼寧省档案館の档案を使い、軍屯が衰退するなかで、誰も耕作しない屯田があったこと、招民が耕作した科田の賦租は軍屯より低かったことなど、編纂史料では知ることのできない軍屯の状況について指摘した。周振鶴[1993]は『明代遼東档案匯編』に掲載されている155号档案の復元をおこなった。しかし、その内容の分析まではしていない。

衛所に所属した軍士については、周遠廉[1980a]が档案を使い、洪武年間に遼東に配置された軍士の多くは、罪人として遼東に流された人であったことを指摘した。また、上級武官からさまざまな名目（例えば武器の使用）で金銭を徴収されたこと、上級武官の私田の耕作に使われことなどから、多数の逃亡者が出ていたと主張した。王廷元[1981]は軍戸の状況について考察し、軍戸が疲弊する理由として、第一に軍戸には正軍兵士の生活を支えるため余丁が配置されていたが、成化年間以降余丁は正軍の補充にあてられたため減少してしまい、軍戸の生計に支障が出ていたこと、第二に衛所の上級武官は軍士を私役していたことを指摘した。そして、軍戸の疲弊により遼東の軍事力は低下したので、家丁を中心とした軍隊が主力になったと主張した。姜守鵬[1987]も、衛所制が機能しなくなり、衛所軍士による軍事力は低下する一方、有力者の家丁が兵力として活躍していたと主張した。岡野昌子[1990]は軍戸の徭役について検討し、軍戸を掌握するため「均徭冊の審編」が頻繁におこなわれていたこと、具体的な均徭の内容、均徭銀の起源、銀額について考察した。

上級武官の圧迫下に置かれた軍士は、16世紀になると反乱を起こしていた。叢佩遠[1985c]は、1509年（正徳４年）から1540年（嘉靖18年）までを第一次兵変期、1599年（万暦27年）の高淮の遼東赴任から1600年（万暦28年）の金得時の反乱を経て、1608年（万暦36年）に高淮が遼東を去るまでを第二次兵変期として考察している。朱誠如[2002]も軍屯と軍士の抵抗について検討している。

日本では1535年（嘉靖14年）に起きた兵変について、岡野昌子[1989]と諸星健児[1992]が考察を加えている。岡野昌子は、衛所制が崩壊する中での社会矛盾、遼東巡撫呂経の改革への反発のなかで兵変が起きたことを指摘した。諸星健児は遼東巡撫呂経の生涯と当時の遼東の状況を検討し、呂経

は軍士の俸給不足を解決するため「屯田清査」を推進しようとしたが、屯田を不法占拠していた遼東有力者はこれに反発し、兵変を起こして呂経を追い出したのではないかと主張した。

以上の諸見解をまとめると、①軍屯にかけられた重い租税、②武官による軍士の私役、③武官による屯田の私田化、④軍士の逃亡者増加、⑤周辺勢力の侵攻による農業破壊により軍屯は崩壊した。軍屯が崩壊したため軍糧の自給はできなくなったので、開中法や京運年例銀により軍糧を確保した。その結果、遼東へは銀が流入し、遼東社会は銀に依存した経済へと変容した。また、軍屯の崩壊は衛所制の崩壊をも導き、遼東の軍事力は衛所制とは違った制度(家丁)で維持する必要性が生じていたとまとめられる。

遼東の軍士には流人が多かった。楊暘[1985、1988a、1992b、1999]は、流人が遼東に来た理由、その生活状況について考察し、軍士が耕作した官田の負担は民田よりも重かったことなどを明らかにした。また楊暘[1986、1990、2005b、2007]は、四川、山西、江蘇、広東から遼東へ流入した人についても考察している。孫与常[1986b]は、鉄嶺衛の流人が、どのような理由で流人となったのか、鉄嶺衛で何をしていたのかについて考察した。

⑥明代後期の遼東

16世紀以降、遼東辺牆東側での農業開発が進んだ。このため漢人の勢力が女真の生活地にまでおよぶようになり、漢人と女真のトラブルも増えた。この問題は戦前にも関心がもたれ、和田清[1919]と孫祖繩[1942]が考察している。この他に、朱誠如[1982]、邸富生[1994]、張士尊[2002c]、李智裕[2011b]の研究が出されている。女真とのトラブルが続く遼東統治を立て直そうした高拱の経略については、岳天雷[2010]が考察している。

全漢昇[1970]は、北辺各地の米価を考察するなかで、遼東の米価についても検討し、1478年に上昇したがほどなく下落し、1558年以降再び上昇したが1567年下落し、1618年以降また上昇したという変動を明らかにした。しかし米価の変動を史料的に検証するに止まり、当時の遼東をめぐる状況との関連からは十分には考察していない。欒凡[2010]は全漢昇の研究成果を継承して、米価の変動をもたらしていた要因について考察した。そして、自然災害による不作、屯田の崩壊による農業生産の低下、屯田が崩壊したので、明朝は銀を支給して食料の購入にあてさせる方針にしていたこと、などの要因を指摘した。

江嶋壽雄[1965]は、遼東における「鋪」のついた地名の由来について考察し、必ずしも鋪店(商店)に起因したものだけではなく、郵鋪から発生したものも多いと指摘した。楊暘[1988b]は、冶金などの手工業について考察した。魏剛[2010、2011]は、遼東での災害およびその影響について検討を加えている。

交通については駅站、河運、海運に関する研究を見てみたい。駅站の状況については和田清[1937b]、李健才[1981]、楊暘[1981c]が考察している。叢佩遠[1984]は、駅站路線の変化について考証している。河運については張新清[1996]、張士尊[2008b]が検討している。海運については、張士尊[1993a、1993b、2002d]が明初の状況や海運と河運の比較について述べている。韓行方[1992]は、明末における山東との海運について考察している。陳暁珊[2010]は、遼東～山東間の海運について、①明初の形成期、②中期の衰退期、③後期の海禁期、④末期の再開期に区分して考察した。明朝は海運の必要性、山東～遼東間の経済的つながりの重要性を認めながらも、伝統的な海禁政策の考え方、船舶維持費の負担、山海関での税収重視、海運の発達は遼東からの軍士逃亡を助長するなどの理由から、海運輸送に力を注いでいなかった。しかしヌルハチの台頭後は情勢が変わり、明朝は海運力の向上を試みたが、間もなく滅亡したと指摘した。

日本語論文

愛新覚羅烏拉熙春

2009「『永寧寺記碑』」『明代の女真人』京都大学学術出版会　pp. 139-222

A. R. アルテーミエフ

2008a「アムール川下流域における13～15世紀の仏教寺院」菊池俊彦、中村和之編『中世の北東アジアとアイヌ』高志書院　pp. 137-174

2008b菊池俊彦、中村和之監修、垣内あと訳『ヌルガン永寧寺遺跡と碑文』北海道大学出版会　138p

池内宏

1917「高麗恭愍王の元に対する反抗の運動」『東洋学報』7-1　pp. 117-136
→『満鮮史研究　中世３』pp. 175-195

1918a「高麗辛禑朝に於ける鉄嶺問題」『東洋学報』8-1　pp. 82-115
→『満鮮史研究　中世３』pp. 235-264

1918b「高麗恭愍王朝の東寧府征伐についての考」『東洋学報』8-2　pp. 206-248
→『満鮮史研究　中世３』pp. 197-234

1918c「高麗末に於ける明及び北元との関係」『史学雑誌』29-1～29-4　pp. 56-90、pp. 161-179、pp. 251-271、pp. 372-389
→『満鮮史研究　中世３』pp. 265-331

1916-20「鮮初の東北境と女真との関係(1～4)」『満鮮地理歴史研究報告』２、４、５、７、1916、1918、1920　pp. 203-323、pp. 299-365、pp. 299-366、pp. 219-254
→改稿して『満鮮史研究　近世』中央公論美術出版、1972　pp. 65-222

1963『満鮮史研究　中世３』吉川弘文館　437p

稲葉岩吉

1913「明代遼東の辺牆」『満洲歴史地理』二、南満洲鉄道　pp. 460-546

江嶋壽雄

1951「太監亦失哈」『史淵』50　pp. 19-26
→『明代清初の女直史研究』pp. 61-70

1953「亦失哈の奴児干招撫」『西日本史学』13　pp. 43-61
→『明代清初の女直史研究』pp. 73-96

1965「明代遼東の鋪について」『石田博士頌寿記念東洋史論叢』東洋文庫
→『明代清初の女直史研究』pp. 533-544

1999『明代清初の女直史研究』中国書店　629p

榎森進

2008「明朝のアムール政策とアイヌ民族ーアムール川下流域の諸民族とアイヌ民族の交易を中心にー」『中世の北東アジアとアイヌ』高志書院　pp. 65-104

岡野昌子

1989「嘉靖十四年の遼東兵変」『明末清初期の研究』京都大学人文科学研究所　pp. 35-65

1990「明代遼東における均徭」『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』下、汲古書院　pp. 955-977

蔭木原洋

2008「洪武帝初期の対琉球政策ー馬・高麗・納哈出を通してー」『東洋史訪』14　pp. 1-14

河内良弘

1966「温河衛考ー朝鮮史料による明代満洲歴史地理考証ー」『朝鮮学報』37･38　pp. 459-471

1971「忽剌温兀狄哈の朝鮮貿易(上、下)」『朝鮮学報』59、61　pp. 49-85、pp. 77-116
→改稿して「忽剌温兀狄哈の朝鮮来朝」『明代女真史の研究』pp. 267-337

1973「朝鮮の建州衛再征と也先の乱」『朝鮮学報』67　pp. 23-58
→改稿して「土木の変と東北」『明代女真史の研究』pp. 338-364

1975「明代兀者衛に関する研究」『史林』58-1　pp. 115-146
→「兀者衛に関する研究」『明代女真史の研究』pp. 231-266

1978「明代野人女真阿速江衛について」『内田吟風博士頌寿記念東洋史論集』同朋舎　pp. 171-191
→改稿して「阿速江衛について」『明代女真史の研究』pp. 561-591

1992『明代女真史の研究』同朋舎出版　760p

川越泰博

1986「明代軍屯制の一考察ーとくに朝鮮牛買付けをめぐってー」『中村治兵衛先生古稀記念東洋史論叢』刀水書房　pp. 153-170

北島万次

1995「永楽帝期における朝鮮国王の冊封と交易」田中健夫編『前近代の日本と東アジア』吉川弘文館　pp. 196-215

斉藤利男
2000佐々木馨「ロシア連邦内での奴児干都司・永寧寺跡および永寧寺碑・重建永寧寺碑、調査報告」『青森県史研究』５　pp. 40-56
清水泰次
1935「明代の遼東経営」『東亜』8-1　pp. 131-141
1937「明代満洲屯田考」『地友会雑誌』2-2　pp. 25-39
末松保和
1941「麗末鮮初に於ける対明関係」『京城帝大史学論叢』２
→『青丘史草』１、1965
→『末松保和朝鮮史著作集５　高麗朝史と朝鮮朝史』吉川弘文館、1996　pp. 124-291
杉山清彦
2008「明初のマンチュリア進出と女真人羈縻衛所制」菊池俊彦、中村和之編『中世の北東アジアとアイヌ』高志書院　pp105-134
瀬野馬熊
1923「朝鮮廃四郡考(上、下)」『東洋学報』13-1、13-3　pp. 28-54、pp. 363-523
谷井陽子
2009「明初の対モンゴル軍事政策とその帰結」『史林』92-3　pp. 491-524
塚瀬進
2012「明末清初におけるマンチュリア史研究の現状と課題(上、下)」『長野大学紀要』34-1、34-2　pp. 9-26、pp. 15-52
津田左右吉
1964a「高麗末に於ける鴨緑江畔の領土」『津田左右吉全集』11　pp. 379-400
1964b「高麗末に於ける東北境の開拓」『津田左右吉全集』11　pp. 400-438
1964c「鮮初に於ける豆満江方面の経略」『津田左右吉全集』11　pp. 439-463
1964d「鮮初に於ける鴨緑江上流地方の領土」『津田左右吉全集』11　pp. 464-482
1964『津田左右吉全集』11、岩波書店　515p
鳥居龍蔵
1947「奴児干都司考」『燕京学報』33
→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 67-134
→『鳥居龍蔵全集』６巻、朝日新聞社、1976　pp. 299-350
内藤湖南
1929「奴児干永寧寺二碑補考」『読史叢録』
→『内藤湖南全集』７巻、筑摩書房、1970　pp. 583-591
長田夏樹
1958「奴児干永寧寺碑蒙古女真文釈稿」『石浜先生古稀記念東洋学論叢』pp. 36-47
荷見守義
1995「明朝の冊封体制とその様態－土木の変をめぐる李氏朝鮮との関係」『史学雑誌』104-8　pp. 37-73
1999「李朝の交隣政策とその展開－土木の変期の明・女直・日本との関係を中心に－」『人文研紀要（中央大学)』34　pp. 41-68
2000「明代遼東統治体制試論」『人文研紀要（中央大学)』37　pp. 1-29
2002「辺防と貿易－中朝関係における永楽期－」『中央大学東洋史学専攻創設五十周年記念アジア史論叢』pp. 113-135
2006「明代巡按『遼東』考」『九州大学東洋史論集』34　pp. 157-185
2007「明代遼東守巡道考」『明代中国の歴史的位相（上）　山根幸夫教授追悼記念論叢』汲古書院　pp. 111-140
2008「北緯四〇度の歴史学－東アジア世界における北方日本－」『北方社会史の視座』３、清文堂出版　pp. 3-29
2009「都司と巡按－永楽年間の遼東鎮守－」『档案の世界』中央大学出版部　pp. 123-180
2010「明朝遼東総兵官考－洪武年間の場合－」『人文研紀要（中央大学)』68　pp. 133-167
2011a「明代巡按山東監察御史の基礎的考察」『人文研紀要（中央大学)』72　pp. 91-134
2011b「明代遼東における情報と審判」『情報の歴史学』中央大学出版部　pp. 123-180
深谷敏鐵
1956「朝鮮世宗朝における東北辺疆への第一次の徙民入居について」『朝鮮学報』９　pp. 37-65
1959「朝鮮世宗朝における東北辺疆への第二次の徙民入居について」『朝鮮学報』14　pp. 129-144
1961a「朝鮮世宗朝における東北辺疆への第三次の徙民入居について」『朝鮮学報』19　pp. 24-54

1961b「朝鮮世宗朝における東北辺疆への第四次の徙民入居について」『朝鮮学報』21・22 pp. 265-294

朴彦

2008「明代における朝鮮人の遼東移住」『東洋史研究』67-1　pp. 1-34

増井寛也

1982「『乞列迷四種』試論ー元明時代のアムールランドー」『立命館文学』444･445　pp. 96-130

諸星健児

1990「明代遼東の軍屯に関する一考察ー宣徳～景泰年間の屯糧問題をめぐってー」『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』汲古書院 pp. 165-186

1992「遼東兵変と呂経」『東洋大学文学部紀要　史学科編』18　pp. 75-104

箭内亙

1914「兀良哈三衛名称考」『東洋学報』4-1 pp. 77-99
→『蒙古史研究』刀江書院、1930　pp. 1-32

楊暘

2008「永寧寺碑文と北東アジアー奴児干都司と黒龍江下流域・サハリンの先住民族との関係を中心にー」『中世の北東アジアとアイヌ』高志書院 pp. 15-41

李仁榮

1937-39「鮮初廃四郡地理考(上、下)」『青丘学叢』29、30　pp. 91-142、pp. 117-157

和田清

1919「明末に於ける鴨緑江方面の開拓(１～４)」『史学雑誌』30-9～30-12　pp. 47-72、pp. 65-93、pp. 68-80、pp. 65-89
→『東亜史研究(満洲篇)』pp. 503-565

1929「兀良哈三衛の本拠について」『史学雑誌』40-69　pp. 1-52
→『東亜史研究(蒙古篇)』pp. 107-149

1930「正統九年の兀良哈征伐について」『東洋学報』18-3　pp. 125-134
→『東亜史研究(蒙古篇)』pp. 867-877

1930-32「兀良哈三衛に関する研究(上、下)」『満鮮地理歴史研究報告』12、13　pp. 137-311 pp. 261-498
→『東亜史研究(蒙古篇)』pp. 151-423

1934-37「明初の満洲経略(上、下)」『満鮮地理歴史研究報告』14、15　pp. 177-298、pp. 71-292
→『東亜史研究(満洲篇)』pp. 260-477

1937a「明代の記録に現はれたる黒龍江下流域の土人」『満鮮地理歴史研究報告』15　pp. 320-353

1937b「海西東水陸城站について」『満鮮地理歴史研究報告』15、1937　pp. 293-319
→『東亜史研究(満洲篇)』pp. 485-502

1939「支那の記載に現はれたる黒龍江下流域の原住民」『東亜学』１ pp. 1-50
→『東亜史論藪』生活社、1942　pp. 454-506

1955『東亜史研究(満洲篇)』東洋文庫　674p

1959『東亜史研究(蒙古篇)』東洋文庫　938p

中国語論文

衣保中

1993「試論明代遼東軍屯的破壊与民田的発展」李洵主編『明史論集』吉林文史出版社　pp. 488-495

烏雲畢力格

2003「関于朶顔兀良哈人的若干問題」『蒙古史研究』７　pp. 221-233

于暁光

2005「土木之変前後明朝与朝鮮圍繞女真問題的交渉」『登州港与中韓国際学術討論会論文集』山東大学出版社　pp. 406-416

袁森坡

1991「明朝後期与遼東蒙古的関係」『明史研究論叢』５　pp. 197-228

王化鈺

1993「呼蘭河衛所新考」李洵主編『明史論集』吉林文史出版社　pp. 548-557

王劍

2006「納哈出盤踞遼東時明朝与高麗的関係」『中国辺疆史地研究』４　pp. 103-112
→『黒水文明研究』黒龍江人民出版社、2007 pp. 107-118

王廷元

1981「略論明代遼東軍戸」『安徽師大学報(哲学社会科学版)』４　pp. 74-82

王冬芳

1997「関于明代中朝辺界形成的研究」『中国辺疆史地研究』３　pp. 54-62

奥登
1986「蒙古兀良哈部落的変遷」『社会科学輯刊』２、３　pp. 60-66　pp. 75-76
奥拉
2001「明末清初的朶顔衛与喀喇沁的関係」『内蒙古社会科学』５　pp. 49-51
何宝善
2007「明成化時期在遼東的修辺工程」『黒水文明研究』黒龍江人民出版社　pp. 128-135
岳天雷
2010「論高拱的治遼方略－以明隆慶五年“遼左大捷”為中心的考察」『河南教育学院学報(哲学社会科学版)』２　pp. 23-28
額徳
2001「明代朶顔衛源考」『内蒙古民族大学学報(社会科学版)』３　pp. 51-57
郭倍貴
2011于秀麗「明代遼東進士的歴史貢献」『社会科学輯刊』１　pp. 166-174
韓行方
1992王宇「明朝末期登莱餉遼海運述略」『遼寧師範大学学報(社会科学版)』４　pp. 85-88
魏剛
2010「明代遼東災害救治述論」『大連大学学報』５　pp. 11-13
2011「明代中後期遼東地区的水旱災害与飢荒」『大連大学学報』４　pp. 56-59
鞠徳源
1980a「従『三万衛選簿』看明朝政府奴児干地区経営」『文物集刊』２　pp. 1-23
1980b「関于明代奴児干永寧寺碑的考察和研究」『文献』１　pp. 64-90
邸富生
1994「明代移建寛奠六堡考略」『遼寧師範大学学報(社会科学版)』２　pp. 85-88
姜守鵬
1987「明末遼東勢族」『社会科学戦線』２　pp. 203-209
1990「明代遼東経済」『社会科学輯刊』３　pp. 102-107
姜陽
2006「明初鉄嶺衛設置与高麗関係述略」『韓国学論文集』15　pp. 73-79
姜龍範
1998劉子敏「明太祖在位時期大明与高麗的関係」『延辺大学学報(社会科学版)』２　pp. 58-62
1999劉子敏『明代中朝関係史』黒龍江朝鮮民族出版社　502p
建文
1995「論明代対東疆地区的管轄問題」『北方文物』２　pp. 71-77
→『中朝関係史研究論文集』吉林文史出版社、1995　pp. 200-215
賈敬顔
1993a「『開元』、『遼東』二志所記黒龍江下游諸民族的研究」『東北古代民族古代地理叢考』中国社会科学出版社　pp. 161-180
1993b「阿哈、娄得与成討温衛」『東北古代民族古代地理叢考』中国社会科学出版社　pp. 205-210
1993c「《永寧寺碑》題名人考」『東北古代民族古代地理叢考』中国社会科学出版社　pp. 198-204
胡凡
1998「論明代洪武時期的北部辺防建設」『東北師大学報(哲学社会科学版)』４　pp. 47-53
2006「明代洪武永楽時期北辺軍鎮建置考」『文史』77　pp. 167-180
呉文衒
1988「明初対黒龍江上游地区的統一」『学習与探索』５　pp. 133-136
1989「明代黒龍江民族分布及其社会経済状況」『黒龍江民族叢刊』１　pp. 65-71
黄文沁
1981「明成祖時代遼東的経略」『明史研究専刊』４　pp. 145-170
黄麟書
1979「明代遼東鎮遼河以東辺牆考」『辺塞研究』台湾商務印書館　pp. 84-96
朱誠如
1980「明遼東都司二十五衛建置考弁」『遼寧師院学報』６　pp. 52-60
→『管窺集』pp. 279-288
1982「明末遼東“棄地”案考実」『遼寧師院学報』５　pp. 67-71
→『管窺集』pp. 27-32
2002「明代遼東軍屯与軍丁的反抗闘争」『管窺集』pp. 269-278

2002『管窺集　明清史散論』紫禁城出版社　348p

周遠廉

1980a謝肇華「明代遼東軍戸制初探－明代遼東档案研究之一」『社会科学輯刊』２　pp. 45-60

1980b謝肇華「明代遼東軍屯制初探－明代遼東档案研究之二」『遼寧大学学報』６　pp. 53-60

周競紅

1992「論明代兀良哈三衛与東西蒙古、女真的関係」『内蒙古社会科学』４　pp. 85-90

周振鶴

1993「明代衛所屯田的典型実例－『明代遼東档案匯編』一五五号档的復元－」『中華文史論叢』51 pp. 167-184

徐桂榮

1992劉正堃「明代遼東都司諸衛轄所考」『遼寧大学学報』１　pp. 50-53

蒋秀松

1982「従永寧寺碑看明代東北民族的関係」『歴史教学』11　pp. 11-15

→『東北民族史研究(三)』pp. 176-181

1990「関于奴児干都司的問題」『民族研究』６ pp. 85-95

→『東北民族史研究(三)』pp. 165-175

1997『東北民族史研究(三)』中州古籍出版社 464p

鐘民岩

1974「歴史的見証－明代奴児干永寧寺碑文考釈」『歴史研究』１　pp. 142-157

→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 149-164

1975那森柏、金啓孮「明代奴児干永寧寺碑記校釈」『考古学報』２　pp. 33-56

薛景平

1996「明遼東鎮長城東西両端的実地考察」『北方文物』３　pp. 40-44

薛作標

1983「遼東辺牆今昔」『社会科学輯刊』５ pp. 121-125

全漢昇

1970「明代北辺米糧価格的変動」『新亜学報』9-2 pp. 49-96

→『中国経済史研究』中、新亜研究所出版、1976 pp. 261-308

宋徳輝

2010「明朝泰寧衛考述」『博物館研究』３　pp. 57-63

叢佩遠

1980a「亦失哈考略」『中国史研究』４　pp. 153-167

1980b宋徳金「論曹廷傑対永寧寺碑的研究」『文物集刊』２　pp. 24-39

1984「明代遼東驛站線路的変遷」『博物館研究』３ pp. 70-76

1985a「明代遼東辺牆」『東北地方史研究』１ pp. 39-44

1985b「明代遼東軍屯」『中国史研究』３　pp. 93-107

1985c「明代遼東軍戸的反抗闘争」『史学集刊』３ pp. 23-30

1991「試論明代東北地区管轄体制的幾個特点」『北方文物』４　pp. 110-119, 144

1993「遼東辺牆与明代東北社会結構的総体格局」李洵主編『明史論集』吉林文史出版社 pp. 476-487

孫衛国

1997「略論明初与麗末之中韓関係」『韓国学論文集』６　pp. 33-41

孫奕善

1988「明太祖的砂漠戦争」『国立台湾大学歴史学系学報』14　pp. 307-419

孫炎

1985「明初剿撫納哈出与統一東北」『東北地方史研究』１　pp. 32-35

孫祖繩

1942「明代之寛甸六堡与遼東辺患」『東北集刊』３

→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 377-436

孫与常

1986a「簡論朱元璋対東北元朝余部的招撫」『民族研究』５　pp. 71-77

1986b「明代鉄嶺衛的流人」『社会科学戦線』１ pp. 245-251, 289

戴鴻義

1990鮑音「兀良哈部与明朝的関係」『内蒙古師大学報(哲学社会科学版)』１　pp. 90-95

達力扎布

1993「有関明代兀良哈三衛的幾個問題」『慶祝王鐘翰先生八十寿辰学術論文集』遼寧大学出版社 pp. 500-517

→『明清蒙古史論稿』民族出版社、2003 pp. 187-218

智喜君

1991「明代遼東防衛体系的建設」『東北地方史研究』１　pp. 55-61

2000「明代任職遼東的江浙名宦考略」『鞍山師範学院学報』６　pp. 45-50

2003「戊辺名将劉江、畢恭勛績述略」『遼寧師範大学学報(社会科学版)』２　pp. 88-90

張維華

1934a「明代遼東衛所建置考略」『禹貢半月刊』1-7、1934　pp. 6-19

→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 196-209

1934b「明遼東辺牆建置沿革考」『史学年報』2-1 pp. 267-273

→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 370-376

張輝

2003「鉄嶺立衛与辛禑朝出師攻遼」『中国辺疆史地研究』１　pp. 19-25

張暁明

2008「明代遼東都司教育研究」『鞍山師範学院学報』２　pp. 54-57

2010「明代鞍山驛路－以『天朝録』中的記載為中心」『鞍山師範学院学報』３　pp. 30-34

張景波

2009「論明代遼東総兵楊文」『文化学刊』１ pp. 91-95

張杰

2003王虹「明初朱元璋経営鉄嶺以北元朝旧疆始末」馬大正編『中国東北辺疆研究』中国社会科学出版社、2003　pp. 87-100

2004「朱元璋設置鉄嶺衛于鴨緑江始末」『遼寧大学学報(哲学社会科学版)』１　pp. 72-76

趙現海

2010「洪武初年明、北元、高麗的地縁政治格局」『古代文明』１　pp. 90-97

張士尊

1990-91「海城西部明代墩台考実(1～3)」『鞍山師範学院学報』90-4、91-1、91-2　pp. 26-29、pp. 14-17、pp. 40-44

1992a「明代遼河套西部辺牆辺台考実」『鞍山師範学院学報』１　pp. 60-65

1992b「明代遼河套西部辺城考実」『鞍山師範学院学報』２　pp. 48-50, 63

1993a「洪武年間遼東海運述論」『鞍山師範学院学報』２　pp. 24-27

1993b「論明初遼東海運」『社会科学輯刊』５ pp. 116-122

1994a「明代遼東二十五衛建置考釈(正、続)」『鞍山師範学院学報』１、２　pp. 34-38、pp. 32-35

1994b「論明末遼東軍食与明清戦争的関係」『鞍山師範学院学報』４　pp. 12-21, 52

(同「明末遼東軍食問題述論」『山東師大学報(社会科学版)』1996-2　pp. 44-49は同内容である)

1997「明初中朝関係中出現的幾個問題」『鞍山師範学院学報』１　pp. 36-43

1997-98「明代総兵制度研究(上、下)」『鞍山師範学院学報』97-3、98-3　pp. 20-24、pp. 12-17, 35

1998「明代総兵社会地位的歴史変遷」『瀋陽師範学院学報(社会科学版)』４　pp. 23-27

2000「明朝与朝鮮交通路線変化考」『鞍山師範学院学報』４　pp. 13-17

2002a「明初遼東吸引少数民族南下定居政策述略」『鞍山師範学院学報』４　pp. 18-25

2002b「明代遼東都司軍政管理体制及其変遷」『東北師範大学(哲学社会科学版)』５　pp. 70-76

2002c「明代遼東東部山区海島開発考略」『遼寧大学学報(哲学社会科学版)』４　pp. 58-61

2002d「明朝遼東海運与河運」『明代遼東辺疆研究』吉林人民出版社　pp. 315-347

2003「奴児干都司職能分析」『遼寧大学学報(哲学社会科学版)』５　pp. 46-49

2007「建州女真董鄂部族源考」『東北史地』２ pp. 29-36

2008a「明代遼東都司与山東行省関係論析」『東北師範大学(哲学社会科学版)』２　pp. 30-34

2008b「明代遼東路河考」『東北史地』５ pp. 56, 71-76

2010「明代遼東儒学建置研究」『鞍山師範学院学報』１　pp. 31-37

刁書仁

2000「論明初高麗王朝与明朝的関係」『北華大学学報』１　pp. 48-52

→『明清中朝日関係史研究』pp. 30-42

2001a「元末明初中国与高麗、朝鮮的辺界之争」『北華大学学報』１　pp. 51-55
→『明清中朝日関係史研究』pp. 1-13
2000b「明前期中朝東段辺界的変化」『史学集刊』２　pp. 22-27
→『明清中朝日関係史研究』pp. 116-129
2001『明清中朝日関係史研究』吉林文史出版社 391p

張勝彦
1976「明太祖時代遼東之主権的確立与政略」『食貨』5-11　pp. 12-26

張新清
1996「明初遼河航運研究」『遼寧大学学報』４　pp. 19-23

趙中孚
1989「明清之際的遼東軍墾社会」『近代中国初期歴史研討会論文集』中央研究院近代史研究所
→『近世東三省研究論文集』成文出版社、1999年　pp. 665-681

趙立人
1994「洪武時期北部辺防政策的形成与演変」『史学集刊』４　pp. 12-16

張立凡
1983「略論明代洪武期間与北元与戦和」中国蒙古史学会編『中国蒙古史学会論文選集』
pp. 248-254

陳曉珊
2010「明代登遼海道的興廃与遼東辺疆経略」『文史』90　pp. 209-234
2011「明代遼東中層行政管理区劃的形成」『中国歴史地理論叢』２　pp. 21-31

陳文石
1967「明代前期遼東的辺防(洪武四年－正統十四年)」『中央研究院歴史語言研究所集刊』37上、1967　pp. 237-312
→『明清政治社会史論』上、台湾学生書局、1991 pp. 177-282

陳慧
2007「試析15世紀中葉図們江成為中朝界河」『中国辺疆史地研究』３　pp. 101-106, 150

鄭天挺
1982「明代在東北黒龍江的地方行政組織－奴児干都司」『史学集刊』３　pp. 28-33
→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 135-140

程龍
2001「兀良哈三衛南遷気候寒冷説質疑」『中国史研究』１　pp. 123-132

鉄嶺市博物館
2011「遼寧鎮西堡西烽火台、辺牆発掘報告及鉄嶺境内的明代遼東長城」『博物館研究』１
pp. 55-60

董玉瑛
1985「関于肥河衛和嘔罕河衛的幾個問題」『史学集刊』４　pp. 15-23

滕紹箴
1995「明代奴児干都司女真諸衛研究概述与探索」『民族研究』２　pp. 58-66, 107

特木勒
2003「“庚戌之変”与朶顔衛的変遷」『蒙古史研究』７　pp. 211-220
2004「十六世紀後半葉的朶顔衛」『内蒙古大学学報(人文社会科学版)』３　pp. 49-55

佟冬
1998a佟冬主編『中国東北史』第３巻、吉林文史出版社　pp. 533-936
1998b佟冬主編『中国東北史』第４巻、吉林文史出版社　pp. 939-1277

白初一
2006「試論明朝初期明廷与北元和女真地区的政治関係」『内蒙古社会科学』５　pp. 52-56

潘承彬
1936「明代之遼東辺牆」『禹貢半月刊』6-3・4 pp. 61-80
→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 350-369

馮季昌
1998「明代遼東都司及其衛所建置考弁」『歴史地理』14　pp. 176-185

符生
1979「略論朱元璋対遼東的用兵」『遼寧師範学報』２　pp. 41-44

傅朗雲
1985「明代奴児干永寧寺碑漢字碑銘補釈」『博物館研究』１　pp. 83-87
1988楊暘、曹澤民『曹廷杰与永寧寺碑』遼寧人民

出版社　210p

包慶徳

1988「明代遼寧地区蒙古族的遷徙与分布」『中央民族学院学報』３　pp. 28-30

孟東風

1993「明代遼東屯田之興廃」李洵主編『明史論集』吉林文史出版社　pp. 496-503

孟森

1928「満洲源流考所考明代満洲疆域之発微」『史学与地学』
→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 20-28

葉泉宏

1991『明代前期中韓国交之研究(1368－1488)』台湾商務印書館　177p

楊暘

1978「明代亦児古里衛的設置和管轄」『社会科学戦線』１　pp. 198-202
→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 319-323

1979呂昆「明政権対烏蘇里江流域及以東濱海地区的衛所設置和管轄」『社会科学輯刊』１　pp. 133-143
→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 165-175

1980李治亭、傅朗云「明代遼東都司及其衛的研究」『社会科学輯刊』６　pp. 79-85
→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 186-192

1981a「明代奴児干都司衛所的女真人」『中国古史論集』吉林人民出版社　pp. 337-361

1981b「明代遼東都司軍屯的情況和作用」『中国古代史論叢』２　pp. 245-250

1981c「明代遼東駅站的設立、管理及其任務」『瀋陽師範学院学報』４
→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 443-450

1981d傅朗雲「明代東北少数民族和漢族的関係」『求是学刊』２　pp. 100-108

1982a「明代対忽魯愛衛的管轄－兼述《明代遼東残档》」『歴史档案』１　pp. 125-127

1983a傅朗雲「明代松花江流域衛所設置考略」『求是学刊』１　pp. 99-108
→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 176-185

1983b「明代永寧寺再考釈」『社会科学戦線』１　pp. 176-181

1984「従成討温、塔山左衛印出土看明代対二衛的設置管轄」『博物館研究』２　pp. 79-82, 39

1985孫与常、張克「明代流人在東北」『歴史研究』４　pp. 54-66

1986「明代四川籍流人在遼東」『社会科学研究』６　pp. 90-91, 93

1988a孫与常、曹国彦「明初流人在遼東及其歴史作用」『遼寧大学学報』１　pp. 3-7

1988b「明代東北手工業」『社会科学戦線』２　pp. 203-208

1990趙建恒「明代謫寓遼東的山西籍流人」『遼寧師範大学学報』２　pp. 69-74

1992a梁徳「明季中韓図們江流域辺務問題探源－明朝在図們江地区設衛和管轄」『明史研究専刊』10、1992　pp. 1-17

1992b梁徳、洪雲「明代謫寓遼東流人研究」『明史研究』２　pp. 122-131

1992c「明代東北亜絲綢之路」『東疆研究論集』吉林文史出版社　pp. 49-65

1993「明代東北亜絲綢之路与“蝦夷錦”文化現象」『社会科学戦線』１　pp. 118-124, 142
→中村和之訳「明代の東北アジアシルクロードと文化現象としての蝦夷錦」『北海道立北方民族博物館研究紀要』5、1996　pp. 131-147

1994敬知本、梁徳「試論永楽帝経営東疆図們江流域的歴史功績」『博物館研究』1994-2　pp. 38-47, 32

1995敬知本「関于明成祖在東北辺陲実施以佛教“御辺”国策之我見」『博物館研究』２　pp. 27-31, 37

1996黄松筠「中国明代政治与仏教関係－兼述明初于東北以仏教“御辺”的政策」『博物館研究』２　pp. 43-54

1999「明代流人在東北」『第七届明史国際学術討論会論文集』東北師範大学出版　pp. 417-431

2002蘇暁東「再論明初図們江流域地区設衛与轄治」『博物館研究』４　pp. 33-41

2005a「永寧寺碑文銘刻的奴爾干都司与黒龍江下游・庫頁島的先居民族関係」『博物館研究』４

pp. 42-51
2005b「明代江蘇籍謫寓東北的流人及其歴史貢献」『博物館研究』１　pp. 36-39
2007「極其珍貴的歴史档案－明代遼東档案記載広東籍人在東北」『博物館研究』１　pp. 38-41
1982b袁閭琨、傅朗云『明代奴児干都司及其衛所研究』中州書画社　332p
1988『明代遼東都司』中州古籍出版社　303p
1991『中国的東北社会』遼寧人民出版社　437p
1993『明代東北史綱』学生書局　461p
2008楊暘主編『明代東北疆域研究』吉林人民出版社　293p

羅福成

1937a「明奴爾干永寧寺碑女真国書図釈」『満洲学報』５
1937b「奴爾干永寧寺碑補考」『満洲学報』５　pp. 97-103

欒凡

2010「明代遼東的米値、軍糧与時局」『東北史地』３　pp. 65-72

李艶潔

2002「明朝中後期泰寧衛与朶顔衛関係之探討」『内蒙古大学学報(人文社会科学版)』２　pp. 32-35
2005「明代泰寧衛地域的変遷」『内蒙古師範大学学報(哲学社会科学版)』５　pp. 30-34
2006「明代泰寧衛的首領世系変遷」『内蒙古大学学報(人文社会科学版)』６　pp. 12-16
2007「明代泰寧衛的経済生活及与明朝的関係」『内蒙古師範大学学報(哲学社会科学版)』２　pp. 130-133

李花子

2007「明初鉄嶺衛之謎」『韓国学論文集』16　pp. 18-26

李健才

1979「禾屯吉衛和奴児干都司」『社会科学戦線』１　pp. 226-230
→『東北史地考略』pp. 203-212
→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 327-331
1981「明代東北駅站考」『社会科学戦線』２　pp. 182-188
→『東北史地考略』pp. 252～270
→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 451-457
1985「明代兀良哈三衛」『博物館研究』pp. 77-80, 87
→『東北史地考略』pp. 243-252
→『東北亜史地論集』pp. 223-230
1986a『明代東北』遼寧人民出版社　292p
1986b『東北史地考略』吉林文史出版社　290p
2010『東北亜史地論集』蘭州大学出版社　373p

李興盛

1982「奴児干都司的建立」『求是学刊』３　pp. 78-83

李三謀

1989「明代遼東都司、衛所的行政職能」『遼寧師範大学学報(社会科学版)』６　pp. 71-77
1996「明代遼東都司衛所的農経活動」『中国辺疆史地研究』１　pp. 31-37

李洵

1990「論明朝的全遼政策」『鄭天挺紀念論文集』中華書局　pp. 389-419
→『下学集』中国社会科学出版社、1995　pp. 352-374

李新峰

1998「恭愍王後期明高麗関係与明蒙戦局」『韓国学論文集』７、1998　pp. 306-312

李智裕

2011a「明代定遼右衛遷治鳳凰城探析」『鞍山師範学院学報』１　pp. 38-40
2011b高輝「明代遼東東部山区開発考略」『東北史地』４　pp. 43-45

李婷

2002「明前期朝鮮族移居遼東的原因、途径及開発貢献」『鄂州大学学報』３　pp. 47-50

劉謙

1982「遼東長城考査」『遼寧大学学報』５　pp. 57-60
→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 439-442
1989『明遼東鎮長城及防御考』文物出版社　236p

盧偉

2006張可「亦失哈十下奴児干」『黒龍江民族叢刊』６　pp. 74-78

林世慧

1990「略論明代遼東城鎮的興衰」『社会科学戦線』４　pp. 233-239

黎敬文

1976「明代東北疆域考」『考古学報』1　pp. 63-81
→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 1-19

呂光天

1981「論明朝政府対黒龍江流域各族的管轄」『学習与探索』1　pp. 138-144
→『東北歴史地理論著匯編』４、吉林人民出版社、1986　pp. 141-147

和希格

1993「1413年永寧寺碑与金代女真文石刻」『内蒙古大学学報(哲学社会科学版)』2　pp. 20-25